

# 植民地統治と社会的包摂・排除

— 帝国日本の台湾・朝鮮（韓）半島における社会政策を中心に —

中京大学 大友昌子

## 1 目的

この報告の目的は、貧困をめぐる社会的包摂と排除の歴史を、帝国日本の植民地統治の実際を通して検討するところにある。

具体的には、台湾と朝鮮（韓）半島における植民地社会政策が、いかなる排除と包摂の実態と論理を表出したのかについて報告し、植民地社会政策を「包摂と排除」の論理で検討することの有効性と限界性を論じる。

## 2 方法

そこで、データとしては、日本統治時代の台湾、朝鮮（韓）半島の行政資料である台湾総督府文書、朝鮮総督府文書を中心に、この時期に刊行された行政調査、新聞、雑誌、その他を使用する。この時期の台湾、朝鮮（韓）半島の社会政策は、宗主国である日本内地の社会政策と密接に関連しており、比較検討には日本の社会政策の実態を軸に、台湾、朝鮮（韓）半島の3地域の比較を行うという方法をとる。

## 3 結果

分析の結果、帝国日本の植民地統治における社会政策は、「排除と包摂」を巧みに組みあわせた統治という性格を示した。植民地統治下の社会政策のベクトルは日本内地と同様に「近代化」という方向性と力を示したが、台湾と朝鮮（韓）半島では、異なる様相を呈することとなった。この背景には各国・地域の社会政策を受け入れる福祉文化的基盤に相違があり、また産業化の進展の程度にも差異があったことがあげられる。

## 4 結論

以上から、こうした歴史研究に「排除と包摂」の2つの対項目とりこむ有効性と限界性が明らかになる。植民地体制下の「排除と包摂」の論理は、現代日本のそれとは異なることを明らかにするとともに、欧米列強とは異なる帝国日本の植民地統治の特質、およびポスト・コロニアルの現代に、帝国日本の統治がいかなる影響として再生産されているのかについて考察する。

## 文献

大友昌子 2007 『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』 ミネルヴァ書房